2011 年 10 月 29 日～30 日津田塾大学・第 22 回「数学史シンポジューム」

東北帝國大学と和算史研究Ⅲ
＜林 鶴 一 か ら 藤 原 松 三 郎 へ(1)＞

鈴木武雄
（日本オイラー研究所・元静岡県掛川市教育センター）

[概要]戦前の帝國大学において和算史研究がおこなわれたのは東北帝國大学だけでした。このことはよく知られていることですが、何故東北帝国大学のみにおいて和算史は研究されたのでしょうか。

特に東北帝國大学理科大学数学科創立時に教授として就任した林鶴一と藤原松三郎が、和算史研究を積極的に行ったことは、決定的に重要です。林と藤原の二人だけが教授で、助教授に窪田忠彦、助手に小倉金之助のすべてが数学教室のスタッフでした。翌年掛谷宗一が助教授として加わりました。すなわち、林と藤原は東北帝國大学へ就任し、退職するまで教授職でした。林と藤原は、協力して新設の東北帝國大学理科大学数学科を創造したのです。従って、東北帝國大学数学科の特徴は、すぐれて林と藤原の個性が強く反映しています。この林と藤原の個性と歴史的な変遷が、和算史研究へどのように影響していたのかを追究します。

．昭和 4 年 4 月林鶴一の突然の早期退職は、林自身の和算研究への関わりを決定づけます。また、昭和 10 年 10 月林鶴一の急逝は、藤原松三郎が数学研究から和算史研究へと急転回させる契機となりました。この二つの出来事を論じることによって、東北帝國大学における和算史研究を検証します。

第１節　二人の教授　－　林鶴一と藤原松三郎

林鶴一と藤原松三郎が東北帝國大学理科大学教授を命じられたのは、明治 44 年(1911 年)のことです。林は３８歳で、藤原は３０歳でした。窪田は２６歳、小倉２６歳でした。実に若々しいスタッフでした。林と藤原は燃えるような情熱で数学研究と教育に全力を傾注したことが理解できます。

林と藤原の関係からしますと、両者とも教授職ですが林は主任教授であり、東北数学雑誌を私費で創刊し終生編集主任をつとめ、年齢的にも８歳の違いは大きかったでしょう。

性格的にも、林は苦労人であり豪放磊落で親分肌のところがありましたが、藤原は東京帝國大学を首席で卒業し恩賜の銀時計を下賜された非常な秀才で、性格は実直誠実でした。

林と藤原の関係は、両者の違いを超えて協力し合って新設東北帝國大学の数学教室を創り上げたのです。ただ、年月と共に、両者の考え方の違いや環境の違いは、微妙な変化をもたらしたであろう事は想像が付きます。たとえば、大正５年(1916 年)それまで林の私費によって編集刊行されていた東北数学雑誌が大学へ移管されました。林のドイツの数学雑誌クレルレのように個人が編集刊行する数学雑誌を考え実行していたので、大学への移管を非常に口惜しがったと言います。このことは平山諦から個人的にも聞きました。林は口惜しがって何日か大学へ来なかったと聞きました。

第２節　林鶴一と藤原松三郎の論文数と掲載誌一覧及び出来事

西暦 和暦	林　鶴　一		藤原　松三郎	
	東北数学雑誌(和算)	他の雑誌等(和算)	東北数学雑誌(和算)	他の雑誌等(和算)
１９１１年 明治44年	１１本(２) 数学教室主任 図書館主幹　(38歳)	０本(０) 東北数学雑誌創刊	２本(０) (30歳)	１本(０)
１９１２年 明治45年・大正元年	９本(１)	８本(１)	３本(０)	１本(０)
１９１３年 大正２年	７本(０)	１本(０)	０本(０)	１本(０)
１９１４年 大正３年	６本(１)	５本(０)	６本(０)	１本(０) ＊第一次世界大戦
１９１５年 大正４年	４本(２)	５本(０)	２本(０)	２本(０)
１９１６年 大正５年	７本(３) 図書館長	８本(２) 東北数学雑誌大学移管	５本(０)	１本(０)
１９１７年 大正６年	５本(２)	３本(１) ＊菊池大麓逝去	２本(０)	１本(０)
１９１８年 大正７年	７本(１)	５本(０) ＊蜂須賀茂韶逝去	２本(０)	２本(０)
１９１９年 大正８年	５本(２) 第二代理学部長～	７本(０) 日本中等教育数学会創設・会長就任	２本(０)	３本(０)
１９２０年 大正９年	４本(１) 理学部長	８本(０)	３本(０) ＊学術研究会議官制勅令	４本(０)
１９２１年 大正１０年	４本(０) 理学部長	６本(０)	３本(０) 欧米へ出張	０本(０) ＊藤澤利喜太郎退職
１９２２年 大正１１年	４本(１) 理学部長	８本(０)	０本(０)	２本(０)
１９２３年 大正１２年	０本(０) ～理学部長 学術研究会議議員	３本(０)	１本(０) 学術研究会議議員・数学部副部長	１本(０) ＊関東大震災
１９２４年 大正１３年	５本(１) ～図書館長	１３本(０)	０本(０) 第三代理学部長～	３本(０)
１９２５年 大正１４年	１本(０)	３本(０)	１本(０) 帝國学士院会員	４本(０)
１９２６年 大正15年・昭和元年	５本(２) 学術研究会議退任	１７本(０)	０本(０) ～理学部長	５本(０) ＊第三回汎太平洋学術会議(東京)
１９２７年 昭和２年	３本(０)	８本(０)	０本(０)	１本(０)
１９２８年 昭和３年	１本(１) 総長に立候補？	８本(０) 惜敗(井上仁吉当選)	０本(０)	１本(０)
１９２９年 昭和４年	２本(１) 早期退職(55歳)	０本(０)	０本(０)	１本(０)
１９３０年 昭和５年	０本(０)	７本(１)	０本(０)	２本(０)
１９３１年 昭和６年	６本(６)	２本(２)	０本(０)	１本(０)
１９３２年 昭和７年	５本(５)	１１本(１１)	０本(０)	１本(０)

１９３３年 昭和８年	２本(２)	８本(６)	１本(０)	０本(０) ＊藤澤利喜太郎逝去
１９３４年 昭和９年	２本(２)	２２本(１１)	０本(０)	０本(０)
１９３５年 昭和１０年	３本(３) 逝去(６２歳)	８本(３)	０本(０) (５４歳)	０本(０)
１９３６年 昭和１１年	２本(２)	７本(６)	１本(０) 林への追悼文 オスロのＩＣＭへ	３本(０) 林への追悼文
１９３７年 昭和１２年	＊『林鶴一博士・和算研究集録』		０本(０)	０本(０)
１９３８年 昭和１３年			０本(０) 第四代理学部長～	３本(１) ＊『藤澤博士追想』
１９３９年 昭和１４年			２本(２)	６本(５) 支那朝鮮へ出張
１９４０年 昭和１５年			６本(６) ～理学部長 総長に推薦さる→	４本(４) 支那朝鮮へ出張 固辞
１９４１年 昭和１６年			２本(２) １月 講書始の儀 →	３本(３) 日本数学史御進講
１９４２年 昭和１７年			１本(１) 定年退職(61 歳)	５本(５)
１９４３年 昭和１８年			０本(０)	２本(２)
１９４４年 昭和１９年			０本(０)	２本(２)
１９４５年 昭和２０年			０本(０) 卒業記念講演	３本(３)
１９４６年 昭和２１年			０本(０) 逝去(６５歳)	１本(１)
１９４９年 昭和２４年			０本(０)	２本(２)

この年表をつぶさに観ると、いくつかの節目があることが分かります。その一つが、昭和 4 年林鶴一の突然の早期退職です(＊定年退職制が出来ていたか不明)。二つめは、昭和 10 年 10 月 4 日松江高等学校の教壇で林鶴一が急逝したことです。この二つの節目を中心として、東北帝國大学と和算史研究の有り様を考察します。

第３節　和算（史）研究についての林と藤原の認識の違い

林鶴一は和算研究を数学研究の一部（＊一つのアプローチ）と考えていたと思われます。それゆえ、特選項目として和算研究があったのでしょう。平山諦は「林鶴一のゼミで和算を研究した。」と私に語りました。従って、林は和算研究枠としての研究者を確保することを考えていなかったと思われます。柳原吉次は東北帝國大学数学科の卒業生で第二代目の助手になり、多数の和算の論文を東北数学雑誌等へ書きました。しかし、その後助教授に昇格することなく、山形高等学校教授として転出しています。

藤原松三郎は、和算史研究と題した一連の論文名の通り、歴史研究と考えていたと思われます。和算史研究を理学部数学科の枠組みではなく捉えていたので、昭和 16 年東北帝國大学附属和算研究所の設立を考え申請したのでしょう。藤原は平山諦を将来の和算研究所のスタッフとして講師に抜擢しました。しかし、この和算研究所の構想は挫折してしまいました。

この挫折の理由は、諸説ありますが、私は太平洋戦争が勃発したことの影響だと思います。戦争遂行に直結しない和算研究は軍部にとってどうでもよいことでしょう。

この林と藤原の和算（史）研究についての認識の違いは、東北大学にとって（＊あるいは日本の数学史研究にとって）重大な課題を提起してきました。

第４節　林鶴一から見た藤原松三郎

まず、林鶴一が東北帝國大学教授就任を藤沢利喜太郎に要請されたとき、「藤原（松三郎）君が一緒なら、(引き受けます)」といったと言う話があります。

林にすれば、京都帝國大学理工科大学数学科のただ一人の助教授として赴任したが、８ヶ月で辞職した苦い体験があります。新しい数学教室を立ち上げるためには、よきパートナーが必要であるという体験です。東京帝國大学を首席で卒業した藤原松三郎は、当時第一高等学校教授でした。林にすれば藤原が一緒ならば、新しい帝國大学の数学科を新しい構想で立ち上げるために絶好の人物であると思ったでしょう。

実際に数学科運営や講義など、林の構想は藤原のパートナーシップによってほとんどが実現していったのです。例えば、どの教官も一つの専門科目だけの講義をするのではなく、年度ごとに持ち回りで講義されました。実際に林と藤原の論文を見ると、解析学から、代数学、数論、幾何学、確率統計学、応用数学と非常に広い範囲です。教授２人、助教授１人、助手１人（＊その後若干増加しますが）という少ないスタッフでしたから、林の運営方針は非常によかったと思います。卵形線論や卵形面論など典型的な例で、解析的なアプローチや幾何的なアプローチができ、数学教室スタッフの相互が高め会う効果を生みました。そのことは学生たちにも好影響を与えました。学生たちは数学が創り出されていく現場を実体験できたのです。これほど素晴らしい教育はありません。

林による東北数学雑誌の創刊は、そうした教室スタッフや学生たちに自分達の研究成果を発表する場を提供したのです。いくらよいアイデアや研究があっても、論文として刊行されなくては、意味がありません。論文として刊行され公開されたとき、研究は意味を持ちます。林による東北数学雑誌の創刊と継続による成功は、藤原の積極的な寄与によります。これは年表にある藤原が東北数学雑誌へ載せた論文から読み取れます。林は、藤原の誠実な人柄と相まって研究能力の高さ、見識の素晴らしさ、教育についての情熱と質の高さを十分すぎるほど分かっていたでしょう。東北帝國大学数学科の成果について、林は藤原の寄与の大きさを理解していたのです。

人間の性格で、長所は別の面で短所にもなります。リーダーシップがあり親分肌という性格は、組織の長でなければ気が済まなくなります。他人の意見を聞かないで、自分の意見を主張するようになります。林鶴一の場合、東北帝國大学数学教室の中では、常に長でありリーダーとして振る舞えたと思われます。数学教室の運営などで、藤原は林の意見に従ったでしょう。実際に林より８歳も年下の藤原には遠慮もあったはずです。数学研究上ではだれでも同格ですが、教室運営や人事などの諸問題では、教室主任の意見でほとんど決まりでしょう。藤原松三郎による林鶴一の追悼文を読むとそれがよく分かります。

第５節　林鶴一 ……その謎の突然の辞職

昭和４年(1929年)５月、林鶴一は未だ５５歳にもかかわらず突然東北帝國大学を辞職してしまいます。その様子を藤原松三郎は追悼文「林鶴一博士の業績」（文化第３巻・第４号,

昭和 11 年)で「昭和 4 年突如として教授の職を辞せらるるや、・・・・」と記しています。平山諦は『賽祠神算』(昭和 43 年孔版復刻)の序文で師林鶴一について、

「東北大学が創設されて今年(＊昭和 43 年)５８年。明治 44 年 4 月 4 日に恩師林鶴一先生は東北大学の辞令を手にして、和算修史を決意した。師は定年に先立って昭和 4 年 4 月 4 日に職を辞しから昭和 10 年 10 月 4 日に世を終わるまでの努力は並ならぬものがあった。・・・・」

と記しています。この辞職の時期「昭和 4 年 4 月 4 日」は、林鶴一が周囲に公言していたようです。藤原松三郎は追悼文「林鶴一君を憶ふ」(「月刊数学, 昭和 11 年 2 月号」冨山房)で、「昭和 4 年 4 月職を辞さるるまで・・・・」と記しています。林はこの年月日で辞表を東北大学へ提出したかもしれません。ただ、大学が正式に辞表を受理したのは、5 月になってからだと思われます。それは昭和 4 年 5 月 14 日午後 4 時(於総長室)東北帝國大学評議委員会議事録の第一は、

「林教授退官ノ件」

となっていて、

「総長ヨリ退官事情報告アリ、今後ノ待遇等ニツキ協議ノ結果左ノ通リ決定。(イ)名誉教授ニ推薦スルコト、(ロ)有給講師(2,500)ニスルコト、(ハ)賞典ハ俸給月額(年額六千円ノ件ノ)六月分ヲ給典スルコト」

という記録があるからです。東北帝國大学史上で教授の退職で評議委員会の議題になったのはこの件だけです。

第６節　林鶴一の辞職の理由

なぜ林鶴一の辞職問題にこだわるかと申しますと、林の和算研究と深く関連しているからです。それは東北帝國大学の内外の和算研究者との関係でも重要な問題になったからです。林の弟子柳原吉次、平山諦等への影響は非常に大きかったようです。特に、藤原松三郎へ与えた影響は大きかったと推測できます。昭和 10 年林鶴一が松江で急死した後に、藤原松三郎が和算史研究のために全身全霊を捧げ始めることになったのは、林の影響でしかあり得ません。

林の突然の辞職理由は、「和算研究のため」という説が流布しています。たしかに昭和 6 年から死去する昭和 10 年まで和算研究に集中しています。

ただ定年前に教授職を辞するのは、周囲から奇異なこと（＊ある意味で事件）に映ったことでしょう。前記した昭和 4 年５月 14 日における大学評議委員会で林鶴一の辞職の件が採り上げられたのです。退官事情報告が総長よりなされていますが、内容について公式記録は記されていません。

結論的に申しますと、私は「複合的な理由で辞職した」と推理しています。

○<u>和算研究のためという理由</u>　＊藤原松三郎は追悼文で「昭和 4 年から昭和 10 年に至る七カ年に発表された和算に関する論文は約６０編の多きに達し、遺稿として７編を計へる。之を昭和 4 年以前に発表された約５０編に比すると、和算の研究の為めに辞職された観を呈する。」と記しています。

○<u>健康上の理由</u>　＊昭和 10 年 10 月 4 日松江で客死したとき林鶴一は狭心症です。昭和 3 年頃から林は狭心症の心配があったと思われます。そのためか、昭和 4 年の論文は２本だけであり激減しています。また、林鶴一の息子である林五郎(著)「父を憶ふ」『三高同窓会：

会報』第 8 号(昭和 11 年 7 月．pp.49-50)は、「父が危篤、前々からの心臓の病気が又起こったのです。」と書いていることも、その理由です。藤原松三郎の追悼文で「林の危篤は昭和 6 年 10 月」のことです。

○昭和 3 年の総長選挙に惜敗したという理由　＊東北帝國大学創設以来の教授として、数学教室主任、図書館主幹・図書館長、理学部長(８年)など、大きく貢献していました。しかし、総長選挙に立候補したが敗れたようです。(＊公文書では未確認です) このとき第五代総長に当選したのは井上仁吉（1868 年～ 1947 年）でした。この井上仁吉は応用化学者で、大正 7 年東京帝國大学教授より東北帝國大学工学部教授になり、大正 8 年初代の工学部長(任期：大正 8 年 5 月 22 日～大正 10 年 4 月 4 日）になっています。林鶴一が総長選挙に敗れた理由は何であったでしょうか？。総長選挙といってもあくまで「選挙」であり、学問研究上の業績や大学運営への貢献とは別のことが左右したとしても不思議はありません。文部省の意向も働いているかもしれません。井上仁吉の義弟は荒木寅三郎京都帝國大学総長（＊ 1866 年-1942 年：医学者，学習院長，枢密顧問官）であるなどの人脈もあったかもしれません。

○性格による理由　＊林鶴一の性格については、藤原松三郎だけが追悼文で適確に評しています。藤原は追悼文「林鶴一君を憶ふ」のなかで「其事情は知らないが、機峰の烈しい若き林君が周囲と円満に行かなかったと創造し得る所である」と京都帝國大学助教授の辞職理由を述べています。また、同じ追悼文の中で

> 「林君は徹頭徹尾 leader であり pioneer であった。人に従ひ又は人と並んで進む人ではなかった。林君の性格は誰もいふ様に直情徑行である。人が遠慮して言ひ得ないことを、ずばりといってのけるのである。口も仲々わるく、時には随分辛辣な皮肉も飛ぶ。それでゐて人々から信頼されたのは、根が親切であるからであった。負けぬ気の所謂鼻柱の強い所である。相手が何か言ひ出しそうだと思ふと先手を打って、相手に口　きかせぬというふことは　日常見受けられた所であった。稚気もあるが朗らかであった。従っていつも談話の中心であった。君亡き今日誰もさみしいといふ。人に利用されることを毫も介せず、政事家ならば正に親分肌である。磊落の様で其実極めて細心であった。」

と記しています。これは「鶴の一声じゃ！」という逸話に凝縮されます。この藤原松三郎による林鶴一の性格についての率直な証言は、非常に貴重です。1911 年(明治 44 年)東北帝國大学の創設から 1929 年(昭和 4 年)林鶴一が辞職するまでの約２０年間も、林鶴一と藤原松三郎は二人の教授として、数学教室を両輪で創造・運営し支え合ってきた仲です。林鶴一の性格について、藤原松三郎でしか知らない側面まで熟知していたはずです。また、林鶴一にたいする追悼文にしても、一般的に弟子達の言葉は、感謝の言葉しかないでしょう。それに対して、藤原松三郎の追悼文は、数学教室草創期を担った、たった二人の教授として、お互いを知り尽くした同志としての言葉です。林鶴一の性格やある意味で欠点まで追悼文に書けるのは、藤原松三郎でしかありません。

第 7 節　林鶴一の辞職の遠因

林鶴一が辞職を決意するに至った理由（遠因）を考察しましょう。林鶴一が辞職したのが「突如」「突然」のように伝えられていますが、私はそれに至った長年の積み重ねがあったと推測しています。その手掛かりも藤原松三郎の追悼文にあります。

「大正十一年学術研究会議が創設せられ、翌年数学部が加へらるに当り、林君は其委

員に挙げられた。併し其翌年には之を辞し、此学術研究会議には頗る冷淡であった。」は、非常に重要な出来事です。私の手許にある３冊の『大正十四年 学術研究会議会員録－（附第三回汎太平洋学術会議役員並準備委員）』『大正十五年 学術研究会議名簿』『昭和四年 学術研究会議名簿』を見ると判明することがあります。『大正十四年 学術研究会議会員録』(pp.18-19)に数学部部員が列記してあります。

部長	東大理学部教授 正四位勳二	理博	高木貞治(1875 年生)
副部長	東北大理学部教授 正五位勳四	理博	藤原松三郎(1881 年生)
	東京高師教授 従五	理博	掛谷宗一(1886 年生)
	京大理学部教授 正五	理博	園正造(1886 年生)
	同 正五勳四	理博	西内貞吉(1881 年生)
	東北大理学部教授 従四勳三	理博	林鶴一(1873 年生)
	東大理学部教授 正四勳三	理博	吉江琢児(1874 年)

７名の会員を見ると、東大２名、京大２名、東北大２名、東京高師１名です。各帝大から２名ずつに、東京高師１名ですから、各帝大の代表であり、バランスを考えた人選のように見えます。『昭和四年 学術研究会議名簿』を見ると、

部長	東大教授	理博	高木貞治
副部長	東北大教授	理博	藤原松三郎
	東京文理科大教授	理博	掛谷宗一
	東北大教授	理博	窪田忠彦
	京大教授	理博	園正造
	同	理博	西内貞吉
	東大教授	理博	吉江琢児

となり、林鶴一から東北帝大の窪田忠彦に変更されています。

林鶴一の性格から、部長が高木貞治で副部長が藤原松三郎で、自分は只の委員というのでは、面白くなかった考えられます。年齢的にも林鶴一が一番年上でありました。特に、藤原松三郎が林鶴一より上の副部長に坐している光景は気分のよいことでなかったと思われます。東北帝國大学で林鶴一は数学教室主任であり、理学部長、図書館長という重責を担っていました。しかし、林鶴一にたいする日本数学界での評価を高木貞治、藤原松三郎より下に見られていることを名簿と学術研究会議での座席によって明確化されたのです。それで林鶴一は学術研究会議を退任したとしか考えられません。林鶴一は東北帝大の中でも数学教室主任、理学部長、図書館長でも、外部（日本全体の大学や学界）では「長」ではないという現実です。しかも、林鶴一よりも８歳も年下の藤原松三郎が、副部長として高く評価されたことは、微妙な感情が生じたことでしょう。

この学術研究会議会員の人選は、藤澤利喜太郎しかいません。林鶴一は帝國大学時代数学を菊池大麓と藤澤利喜太郎に学んでいますが、菊池大麓を恩師としています。菊池大麓と林鶴一の関係は、菊池自身がイギリス留学中に元徳島藩主蜂須賀茂韶(もちあき)に援助されたことからの縁かもしれません。(＊『破天荒＜明治留学生＞列伝』(小山騰, 講談社. pp.80-82))林鶴一は徳島藩士族でした。ところで菊池大麓は大正 6 年(1917 年)に死去しています。また、林鶴一との直接的な関係は不明ですが、大正 7 年(1918 年)元徳島藩主蜂須賀茂韶が死去しています。林鶴一にすれば二人の後ろ盾を相次いで失ったことになります。一方、藤原松三郎は、藤澤利喜太郎を恩師としています。大正 12 年(1923 年)関東大震災のとき、藤原

松三郎は「恩師藤澤利喜太郎の身を案じて米袋をかついで上京し、探し当てるまで奔走した。」（＊『日本の数学１００年史』上 p.288）という逸話があります。藤澤利喜太郎は実力者であり、数学者で唯一の帝國学士院会員であり、初期の学術研究会議の会員でした。東京帝國大学退職後は貴族院議員としても学界に大きな影響を及ぼしていました。

大正 14 年(1925 年)日本の学界で、林鶴一にとって決定的な出来事が起こりました。それは藤原松三郎が帝國学士院会員になったことです。しかし、林鶴一にはお声が掛からなかったのです。林の性格からすると面白くなかったと思われます。平山諦によるそのころの林鶴一の様子についての証言があります。藤原松三郎が学士院へ出張するために休講し、そのときの掲示板を凝視する林鶴一のことです。

大正 15 年・昭和元年(1926 年：12 月 25 日大正天皇歿)林鶴一は学術研究会議を退任していることも符合します。追悼文で藤原松三郎は

「大正 11 年学術研究会議が創設せられ、翌年数学部が加へられるに当り、林君も其委員に挙げられた。併し其翌年（＊これは藤原の記憶違いか？）には之を辞し、此学術研究会議には頗る冷淡であった。」

と証言していることにも符合しています。

林鶴一にすれば、大正 15 年 10 月 30 日～ 11 月 11 日まで東京で開催された第 3 回汎太平洋学術会議という大きな節目を終わり、それにより学術研究会議議員としての役割を果たしたと思っても不思議はありません。

その２年後昭和 3 年(1928 年)東北帝國大学総長選挙があり、林鶴一が立候補したと思われます。林鶴一の総長選挙立候補の動機は、藤原松三郎との関係だけではなかったと思われます。そのとき総長に当選した井上仁吉は、林鶴一よりも５歳年長です。井上は明治元年(1868 年)京都で生まれ、明治 29 年東京帝國大学工科応用化学科を卒業し、同大学工科助教授、ドイツへ留学、帰朝後教授に昇進、大正 7 年東北帝國大学理科大学教授、大正 8 年初代工学部長になっています。井上の学術研究者としての業績は、それほどはっきりしていません。井上の著作は『工業叢書　工業瓦斯』(博文館，大正元年)くらいしか見付かっていません。ただ、井上仁吉の性格は、温厚円満であったように見えます。一方、林鶴一の東北帝國大学へは創業期から、大きく貢献しています。数学教室主任、理学部長、図書館長と要職を歴任していました。著書や論文は夥しい数でした。林鶴一にすれば、井上仁吉よりも自分の方が総長に適任と考えたと推測します。しかし、総長選挙で林鶴一は敗れたのです。林鶴一の性格が影響したと思われます。林にすれば、日本の数学界でトップになれず、東北帝國大学でもトップになれないという現実に直面したわけです。林鶴一の性格からしますと大きな挫折であったはずです。

このような一連の歴史的な経緯を眺めると、林鶴一が東北帝國大学教授を辞職することになったことも理解できます。特に、５４歳になっていた林鶴一にすれば、学問研究の部分で歴史に名を残したいと思ったことでしょう。その学問研究の対象が和算研究であったのです。また、和算研究は故郷徳島以来の伝統であり、恩師菊池大麓の遺志を継ぐことでもあります。欧米の数学者との交流の中で、「日本の伝統としての数学」＝「和算研究」を強く意識したのでしょう。林鶴一は、欧米で発達した数学に対抗して、日本のオリジナルの数学を模索することもあったでしょう。

和算研究史上で考えますと、林鶴一個人の思いを超えて、林の挫折は大学において数学史を研究する意味・意義を明確化しました。それまで和算家の末裔であった遠藤利貞にしても、

著名な数学史家三上義夫にしても、帝國大学という学術体制の枠外にありました。あくまで在野の数学史研究に過ぎないという見方ができるのです。しかし、林鶴一は東北帝國大学理学部教授です。在野の研究者や一般の民衆から見れば、林鶴一が和算研究をしてることこそ、その学問分野の価値を一段と高める結果となったと思われます。

第８節　林鶴一の終焉と藤原松三郎

昭和 10 年(1935 年) 10 月 4 日林鶴一の終焉は突然訪れました。林鶴一は文部省視学官として（旧制）高等学校を視察していたのです。終焉の地は、島根県松江にあった（旧制）松江高等学校でした。松江高等学校で数学の授業を視察中に教壇において狭心症で急逝されたのです。ある意味で林鶴一らしい終焉の仕方であったと思います。林鶴一は大正 8 年(1919 年)日本中等教育数学会を創設し初代会長に就任しました。若き頃、帝國大学を卒業し、唯一人の助教授とした京都帝國大学で挫折し、松山中学校講師、東京高等師範学校講師・教授での貴重な体験は、日本の中等学校における数学教育を組織しその水準を高めることになったのです。林鶴一は数学教育の現場で終焉したのです。林鶴一の死に方は、武士が激戦の戦場で見事な戦死を遂げたことと同じであったはずです。林鶴一の死を最も深く受けたのも藤原松三郎でした。藤原松三郎による４編もの追悼文はそれを物語っています。また、『東北大学理学数学教室の歴史』にある河田龍夫（＊旧姓高橋。後、東京工業大学教授・慶応大学教授等。ＯＲ学会創設）による「私の先生方へ思い出」の中に、林鶴一の遺骸を藤原松三郎の助手としてお供をして、引き取りに行ったときの様子を眼前に浮かぶような文章にしています。

「‥‥その頃、教授といえば、神様のようなもので、うっかり口も聞いてくれないと思っていました。‥‥汽車で松江に向かうとき、東京から“つばめ”で参りました。先生方は２等車（今で言えばグリーン車）、私や林家の若い遺族の方達（林五郎さんも含まれていました）は３等車で、２等車の先生方を覗きにいったとき、「新成年」（これは当時の代表的なスリラーの雑誌）を読んでおられるのを知って、実は非常に嬉しく思いました。先生でも探偵小説を読んでおられるのかと思って、急に親しみを覚えたわけです。「神様でも小説をよむ」。松江からの帰りは大変でした。普通の列車に霊柩車を１輌連結していてそこに遺骸を安置し、その車両の半分を占めるところに藤原先生はじめ、林家関係の方々や私の座席があったのですが、霊柩車は、焼香できるようになっていて、駅へとまる毎に、聞き知った同窓生の方々が焼香にみえ、その都度、先生が立って御答礼をされるのです。列車は夜行の急行でしたが、夜中でもこれをやるわけで、先生も大変でしたが、駅へ着く度に先生を起こすのが私の役で、私も大変でした。東京駅には朝、着きましたが、ホーム一杯に同窓生や、その他多くの人々が、出迎えられました。‥‥葬儀も大変で勅使（＊天皇陛下のお使い。井野・宮城県知事）がみえましたが、そのリハーサルも大変、とにかく助手だったので走り使いで全く忙しかったものです。‥‥以下略。」

（＊当時の帝國大学教授が、どのような存在であったか、視覚的にもよく分かります。また、岡田良知の追悼文に

「霊柩車は、‥‥歩兵第四連隊渡邊少佐の指揮する二個中隊の儀仗隊の葬送の曲に迎えられ式場に到着し。」

ともある。）

この河田龍夫の文にあるように、藤原松三郎は仙台から林鶴一の遺骸を引取に松江まで列車で行き、列車で仙台まで帰り、葬儀を指揮したのです。藤原松三郎は林鶴一の死を単に大学の同僚教授の死としてだけでなく、まさに二人とない同志の死として向き合っていたのです。仙台から松江へ、松江から仙台まで列車で往復するのは、現在でも大変ですが、当時の蒸気機関車が牽引する列車では想像以上に大変なことであったでしょう。私はこの長時間の列車による仙台と松江への長い往復旅行は、藤原松三郎にとって林鶴一が最後に没頭した和算研究の意味を深く深く考える時間と場であったと思います。「なぜ林鶴一は和算研究に没頭したのか？」「なぜ林鶴一は早期退職してまで和算研究に全身全霊を捧げることをしたのか？」などなどと藤原松三郎は自問自答したはずです。その結果か、藤原松三郎へ大きな転回をもたらし、藤原松三郎自身が和算史研究に全身全霊を傾注することになったと考えられます。

[まとめ]

「東北帝國大学と和算史研究」というテーマは、日本の近代化の有り様の中で追究することが、非常に重要です。特に、帝國大学は、まさに大日本帝国憲法下における大学であって、現在の大学とは異なる視点で考察する必要があります。帝國大学教授職も同じように、特別の存在でした。例えば、林鶴一の葬儀に勅使（天皇のお使い）がみえたのは、林鶴一が大正9年「高等官一等」で、昭和4年「従三位」になっていたからでしょう。すなわち、大日本帝国憲法下で高等官一等と高等官二等は「勅任官」でした。大日本帝国憲法下では官吏は、天皇からの距離に応じて、親任官、勅任官、奏任官、判任官という身分区分がありました。「奏任官」は高等官三等から八等までででした。明治 31 年 8 月林鶴一が京都帝國大学理工科大学助教授に任命されたとき、高等官七等でしたから、奏任官でした。勅任官は各省の次官や府県の知事、陸海軍中将・少将などに相当します。帝國大学では総長には勅任官でした。林鶴一の場合、東北帝國大学数学教室主任、図書館長、理学部長など要職を歴任しているから、勅任官に任命されたのでしょう。前記した河田龍夫が「その頃、教授といえば、神様のようなもので、うっかり口も聞いてくれないと思っていました。‥‥」という言葉も頷けます。

昭和4年4月林鶴一が東北帝國大学教授を５５歳で早期辞職したことは、周囲に衝撃をもたらしたことでしょう。昭和4年5月東北帝國大学評議委員会の第一の議題が、林鶴一の退官の件であったことからも、帝國大学教授職の意味を理解できます。

昭和 10 年 10 月 4 日松江における林鶴一の急逝とその後の葬儀が大学にとって大事件であったことも理解できるでしょう。東京日日新聞(昭和 10 年 10 月 5 日付)に「林鶴一博士数学界の権威」と題して、その詳細な訃報をしています。

「帝國学士院」や「学術研究会議」という存在も、大日本帝国憲法下における位置を考えることです。会員は６０名を定数とし、そのうちから４名が貴族院議員になりました。たとえば、藤澤利喜太郎は貴族院の帝國学士院会員議員でした（＊大正 14 年新設)。菊池大麓は第八代帝國学士院長、貴族院勅撰議員（＊天皇が任命した終身議員）でした。尚、帝國学士院会員は勅任官待遇でした。

さて、何度も書きましたが、林鶴一と藤原松三郎の二人は、東北帝國大学創設時から退職まで教授職でした。まさに東北帝國大学数学教室の二大巨頭でした。その二人が和算を全身全霊で研究したのですから、その大学内外への影響力は想像以上でした。彼ら二人が和算を研究し、それを発表する東北数学雑誌があったことも、アカデミック研究としての位置を確

かにし高めました。藤原松三郎の場合、和算の研究発表の場として、さらに帝國学士院記事もありました。昭和18年(1943年)1月11日を期して藤原松三郎が『明治前日本数学史』の執筆に全身全霊を傾注したのは、大正14年(1926年)44歳で帝國学士院会員になり、その強い使命感の現れでしょう。また、この時期は戦時下であり、非常に困難な時代であったことを考えなくてはなりません。「余の和算史研究」(藤原松三郎)『科学，第11号』(岩波書店，1949年7月)の末に平山諦による附記があり、藤原松三郎のすさまじい研究態度と戦時下における厳しい状況が読み取れます。『明治前日本数学史』は、紀元(皇紀)二千六百年(＊昭和15年，西暦1940年)を期して帝國学士院が企画した一大叢書『明治前科学史』に含まれていたことからも理解できます。現在岩波書店から出版されている『明治前日本数学史』も日本学士院編となっています。

林鶴一と藤原松三郎と、在野で和算の研究者として著名な三上義夫を比較してみると、より理解が深まります。

[謝辞]本稿のために東北大学名誉教授土倉保先生、大阪教育大学前教授松宮哲夫先生、東北大学附属図書館米澤誠氏、東北大学史料館高橋里美氏、日本学士院図書室井上司氏に史料の探索をお願い致しました。それぞれ深く感謝申し上げます。

文献及び註

[1]『学術研究会議：官制及会則並諸規定』(学術研究会議，昭和3年)　＊大正9年8月26日勅令第297号。「第一条 学術研究会議ハ文部大臣ノ管理ニ属シ科学及其ノ応用ニ関シ内外ニ於ケル研究ノ連絡及統一ヲ図リ其ノ研究ヲ促進奨励スルヲ以テ目的トス。」とある。もともと、日本の学術研究会議は、大正8年(1919年)ブリュッセルで開催された国際学術研究会議(International Research Council)に加わるために創られました。国際学術研究会議は、1912年始まった第一次世界大戦により、ドイツ排除のための組織でした。1920年ストラスブールで開催された第6回国際数学者会議に出席した高木貞治が類体論について講演したが、ドイツの数学者が排除されていて、反応がなかったと言うことは、このためであった。

[2]『学術研究会議：建議』(学術研究会議，昭和2年)＊一、研究ノ連絡及統一ニ関スル建議(大正10年提出)。二、南洋学術研究所設立ニ関スル建議(大正10年提出)。三、太陽観測所設立ニ関スル建議(大正10年提出)。～二十一、合成化学研究奨励費設立ニ関スル建議(昭和2年提出)。ただし、数学研究に関する建議はない。

[3]『学術研究会議会員録(大正14年)附第三回汎太平洋学術会議役員並準備委員』＊ p.3 総務部部員：数学部部長高木貞治、同副部長藤原松三郎。pp.18-19 数学部部員：部長高木貞治、副部長藤原松三郎、部員；掛谷宗一、園正造、西内貞吉、林鶴一、吉江琢児。

[4]『学術研究会議名簿(大正15年)』(学術研究会議)＊ pp16-17 総務部部員：数学部部長高木貞治、同副部長藤原松三郎。部員；林鶴一、掛谷宗一、西内貞吉、園正造、吉江琢児。p.57 数学部編纂委員(日本数学輯報担当)主任：吉江琢児、委員：藤原松三郎、林鶴一、掛谷宗一、窪田忠彦、西内貞吉、園正造、高木貞治。

[5]『学術研究会議名簿(昭和4年)』(学術研究会議)p3 総務部部員：数学部部長高木貞治、同副部長藤原松三郎。p.17 数学部：部長高木貞治、同副部長藤原松三郎。部員；掛谷宗一、窪田忠彦、西内貞吉、園正造、吉江琢児。p.60 数学部編纂委員(日本数学輯報担当)主任：吉

江琢児、委員：藤原松三郎、掛谷宗一、窪田忠彦、西内貞吉、園正造、高木貞治、辻正次。
[6]『賽祠神算』(中村時萬纂輯，内藤忠辰校，文化 13 年．昭和 43 年孔版復刻：平山諦)＊平山諦による序文は御自身の定年退職記念として和算史研究、とりわけ恩師林鶴一への想いを書いている。
[7]『自修会会報，第 21 号』(東北帝國大学理学部，昭和 10 年 12 月) ＊林鶴一の追悼文がある(岡田良知、平山諦、松村勇夫、数学教室一学生)。 ＊岡田良知「(10 月 4 日)午後 10 時 50 分仙台発、林信夫、五郎両君と数学教室関係者として藤原教授が高橋(河田)龍夫君を伴われ、‥‥松江へ急行、」とある。葬儀にもついても細述している。
[8]「数学最近発展の一瞥見」(藤原松三郎)『日本学術協会報告，第一巻(大正 14 年),pp.69-74』＊ヒルベルトによる公理主義的数学とそれに反論するブラウアーとの論争など。数学基礎論の勃興に関する論説。
[9]『数藤斧三郎君－遺稿と伝記－』(序文：大正 6 年 10 月)＊数藤斧三郎(1871 年－大正 4 年)は、第一高等学校数学教授等を勤めた。追想録に藤澤利喜太郎「哀悼の辞」、藤原松三郎「忠実な研究家」等が収録されている。数藤と藤原は一高で同僚であった。林鶴一は東北数学雑誌「故数藤斧三郎君」を書き残している。(※数藤斧三郎は旧姓中村で、インド哲学者中村元の母親の義兄にあたる。)
[10]『第三回汎太平洋学術会議国内会員名簿 (大正 15 年 10 月 30 日～11 月 11 日)』＊この日本で最初に開催された大規模な国際学術会議は東京で開催され、林鶴一と藤原松三郎は委員になっているが、数学についての会議はなかった。太平洋地域が数学について発展途上であったからであろう。林鶴一の肩書は「東北大教授(理)」であるが藤原松三郎の肩書は「学術研究会議数学部副部長、帝國学士院会員、東北大教授(理)」である。
[11]『Proceedings of the Third Pan Pacific Science Congress Tokyo 1926』全２巻(帝國学士院会館内学術研究会議，昭和 4 年，vol.1220 頁．vol2.1458 頁)＊学術研究会議会員として林鶴一と藤原松三郎の名はある。ただし、数学に関する会議も論文もない。
[12]『Science Japan past and present －(Third Pan Pacific Science Congress 1926)』(第三回汎太平洋学術会議，大正 15 年 10 月) ＊第 8 章(pp.177-198)三上義夫「Mathematics in China and Japan」である。三上義夫に書かせたのは、誰だろうか？。1913 年三上義夫は『The development in China and Japan. Teubner, Leipzig』を出版している。巻末に帝國学士院会員として数学部門で藤澤利喜太郎、高木貞治、藤原松三郎の名前がある。学術研究会議議員として藤原松三郎と林鶴一等の名前がある。筆者は三上義夫に上記の論文を書かせたのは天文学者平山信あるいは平山清次だと推測している。三上と両平山は親交があり帝國学士院会員であった。しかし、非常に残念なことは過去(Past)は三上義夫が書いたが、現在(Present)が書かれなかったことである。もし高木貞治と藤原松三郎が協力して書けば、歴史的な意義は大きかっと思う。
[13]『Souvenir of the Third Pan Pacific Science Congress 1926』(大正 15 年 12 月)＊写真 10 頁＋36 頁。＊多数の写真と挨拶文がある。
[14]「父の憶ふ」(林五郎著)『会報，第 8 号』(三高同窓会，昭和 11 年 7 月，pp.49-50)＊林鶴一の五男で数学者林五郎の追悼文であり貴重。
[15]『東北帝國大学理科大学 開学記念絵葉書』＊大正 2 年 9 月 22 日スタンプあり。筆者所蔵。
[16]『東北大学史料館史料』＊評議委員会等の元史料。

[17]『東北大学百年史 五 部局史二』(東北大学百年史編集委員会，東北大学出版会，平成 17 年)＊東北大学数学教室百年の研究活動が書かれている。
[18]『東北大学理学部数学教室の歴史』(佐々木重夫著，同数学教室同窓会，昭和 59 年)＊東北大学理学部数学教室の歴史について基本史料。
[19]『東洋数学史への招待ー藤原松三郎数学史論文集』(藤原松三郎数学史論文刊行会，東北大学出版会，2007 年)＊藤原松三郎の全論文は収録されていない。(※残余出版予定)
[20]『日本学士院八十年史』(日本学士院，昭和 37 年)本編，資料編
[21]『日本学術協会会員名簿(昭和 16 年)　附寄付行為及び会員規定』＊大正 14 年 3 月創立。昭和 16 年 1 月財団法人許可。第 3 條「本会ハ本邦ノニ於ケル学術ノ総合的振興普及ヲ図ルヲ以テ目的トス。」第 4 條「本会ハ前條ノ目的ヲ達成スル為メ左ノ事業ヲ行フ。一、学術大会、学術講演会ノ開催。二、学術報告及学術上ノ印刷物ノ出版頒布。三、研究ノ奨励及優秀ナル研究業績ノ表彰。四、其ノ他理事会ニ於テ必要ト認メタル事項。」p.30 藤原松三郎。
[22]『日本数学史要』(藤原松三郎著，宝文館，昭和 27 年)　＊本書は泉信一と平山諦の編集で、巻末に藤原松三郎の年譜がある。
[23]『日本の数学１００年史(上下)』(日本数学会，岩波書店，1983 年～ 1984 年)
[24]『破天荒＜明治留学生＞列伝』(小山騰著，講談社，1999 年)　＊菊池大麓のイギリス留学の様子が分かる。菊池大麓は、元徳島藩主蜂須賀茂韶(1846 年－ 1918 年)に援助され留学を延長できたことは非常に重要である。林鶴一は徳島藩士族であり、菊池大麓との師弟関係も、蜂須賀家への恩義もあったと思う。蜂須賀茂韶は明治 5 年オックスフォード大学へ留学し、後明治 29 年(1896 年)貴族院議長から兼帯で文部大臣になっている。このとき、菊池大麓は蜂須賀家への恩義から文部省(専門学務局長→文部次官)へ移っている。文部省の役人のことを「卑職」としている。文部省専門学務局長は文部次官につぐ職であり決して「卑職」ではない。
[25]「林鶴一君を憶ふ」(藤原松三郎)『月刊 数学』(昭和 11 年 2 月号，富山房)＊本史料は京都帝國大学数学科教授松本敏三編集の雑誌。藤原松三郎は、林鶴一の性格を率直に語っている。
[26]「林鶴一博士小伝」(藤原松三郎)『日本中等教育数学会，昭和 10 年 12 月記』＊林鶴一が創設した日本中等教育数学会への追悼文。略歴の中で京都帝國大学退職の理由を「或事情の為」と記述している。また、「ドイツの Halle 市の Leopoldinische Carolinische Akademie der Naturforscher　の会員に選ばれた。其の他メキシコの Sociedad　Alzate　の通信会員及び Amsterdam　の数学協会の名誉会員にも選ばれた。」「昭和 6 年 10 月に心臓病で一時危篤を伝えられた。」「大正 7 年末、発起人の一人として日本中等教育数学会を創設し、初代から引き続き四期八カ年間会長として同会の基礎を築き上げ、」「昭和十年十二月　藤原松三郎記」。
(※本史料は平山諦先生より頂いたもので、手作りの表紙に「林鶴一博士小傳　藤原松三郎　日本中等教育数学会」と墨書されている。)
[27]「林鶴一博士の業績」(藤原松三郎)『文化』(第 3 巻第 4 号，東北大学文化会，昭和 11 年)＊林鶴一の略歴と研究略歴が丁寧に書かれている。和算史研究の状況が身近な位置から描写されている。
[28]「Obituary Note. Tsurichi HAYASHI(1873-1935)」(Matsusaburo,FUJIWARA)『T.M.J』(第 41 巻，1935 ／ 36 年，pp.265-289)　＊藤原松三郎による林鶴一の追悼文及び全論文。
[29]「林名誉会長ノ訃」「故林名誉会長ヘノ弔辞」(国枝元治)『日本中等教育数学雑誌』(第 17

巻，昭和 10 年）　＊林鶴一の急逝と葬儀記録「本会名誉会長理学博士林鶴一氏ハ文部省視学員トシテ松江高等学校視察ノタメ東京帝大名誉教授吉江琢児、文部属久住秀之助両氏ト同道、10 月 3 日午後 5 時 30 分松江着。翌 4 日午前 11 時半頃同校ニ於テ講演中突然狭心症ノ発作ヲ起シテ昏倒。直ニ最寄ノ田村医師及ビ信太、亀井両博士ノ応急手当ヲ受ケタガ、ソノ甲斐ナク午後零時 15 分遂ニ薨去サレタ。享年６３。訃報ニ接しく仙台市ノ自宅カラハ家族ノ方ガ匆々同地ニ急行シタ。10 月 6 日遺骸のママ遺族方ソノ他随伴ノ諸氏ニ護ラレテ松江発。7 日午後 8 時 10 分東京駅着車。多数出迎者ノタメニ一先ほーむニ下サレ諸氏ノ手ニヨツテ焼香ガ行ハレタ。霊骸ハ同駅ヨリ引ツヅキ霊柩車ニ安置。上野駅ニ移送サレ同駅ニ於テ再ビ焼香ノ上午後 10 時 20 分発東北本線列車ニテ帰仙サレタ。葬儀ハ 10 月 12 日(土)午後零時半カラ仙台市大聖寺ニ於テ厳ニ施行サレタ。」※岡田良知の追悼文によると、福島へ岡田良知、平山諦など約８名が出迎え、仙台まで同乗している。

[30]『萬国学術研究会議並各協会総会参列報告（自大正 15 年至昭和 4 年)』(pp.129-133)
＊ 1920 年.掛谷宗一はフランスのストラスブルグで開催された第三回国際数学協会総会(IMU)及び第 7 回国際数学者会議(ICM)への参加報告を書いている。他の参加者は岡田良知、河口商次、末綱恕一、中島宗治、吉田洋一等。

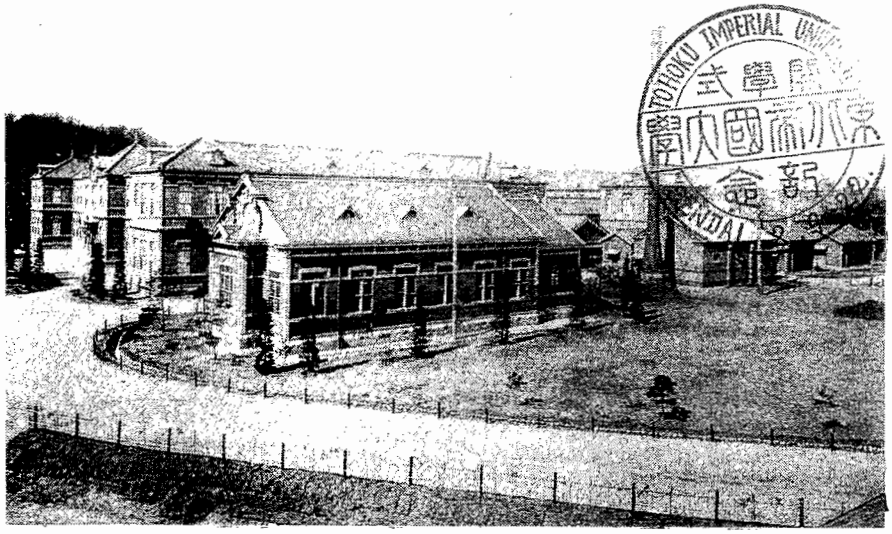
[31]『藤澤博士追想』(同博士記念会，代表者高木貞治，昭和 13 年)　＊藤原松三郎「追想」(pp.267-274) Fujisawa と Fujiwara と似ているのでヨーロッパで間違われたことなど、よい師弟関係がわかる。尚、林鶴一の追想文はない。同出版が昭和 13 年 9 月であり、林鶴一は昭和 10 年に死去していた。

[32]「藤原松三郎先生と平山諦先生；時代と格闘し、遺したこと」(鈴木武雄)『数学史の研究，pp.248-258』(京都大学数理解析研究所講究録，2007 年)

[33]「藤原松三郎先生の数学史研究の業績」(平山諦)『基礎科学，第 2 巻第 1 号』(弘文堂書房，昭和 23 年 2 月)＊藤原松三郎の論文別刷のすべてが平山諦に献呈されています。この別刷は生前平山諦より筆者に託され、現在筆者が所持している。

[34]「余の和算史研究」(藤原松三郎)『科学，第 11 号』(岩波書店，1949 年 7 月)　＊末に平山諦による附記があり、藤原松三郎のすさまじい研究態度と戦時下における厳しい状況が読み取れる。

[35]『和算研究集録』上下(林鶴一著，東北帝國大学理学部数学教室・林鶴一博士遺著刊行会・編集代表理学博士藤原松三郎，昭和 12 年 5 月，東京開成館発行)＊序文は藤原松三郎：昭和十一年六月(記)。凡例「本書の材料の蒐集整頓は主として平山諦君の手によつた。又材料の排列等に関しては柳原吉次君の周到なる忠言を得た。」と書かれている。このことの事実を平山諦先生より筆者は直接に聞いている。この編集を平山諦に託して、藤原松三郎はノルウェイのオスロで開催された第 11 回国際数学者会議(ICM)へ副議長として出席している。平山諦は生前筆者に対して、しばしば『和算研究集録』編集の思い出を語ってくれた。平山は恩師林鶴一ために心血を注いだ編集作業に満足そうだった。



東北帝國大学理科大学全景（大正2年9月22日開学式記念スタンプ）

故林鶴一博士

藤原松三郎教授